

訳注『出雲名勝摘要』（七）

要 木 純 一

○佐々木高綱墓ささき たかつなのはか

松江ヲ距ル西南数町、乃木村（意字郡）、善光寺境内ニアリ。円塔一基、高サ一丈、傍ラニ石燈八箇、老松三幹アリ。廻ラス二垣ヲ以テス。法名ヲ心瀧院殿法嶺源性大居士ト曰フ。佐々木秀義ノ第四子ナリ。源頼朝ニ從ヒ、元暦元年、宇治川ノ役先登第一ノ功名ヲ拳ク。頼朝ノ薨後、世ヲ通レテ南都ニ赴キ、竟ニ西国ヲ周クリ、建保四年二月十五日ヲ以テ卒ス。年七十五。

【訳】この墓は、松江から西南に数町離れた乃木村（意字郡）善光寺の境内にある。丸い形の塔が一基、高さは一丈で、そのそばに石灯籠が八個ある。石垣で周りをぐるると囲んでいる。佐々木高綱は、法名を心瀧院殿法嶺源性大居士という。佐々木秀義の四番目の子である。源頼朝に臣従して、元暦元年（一一八四）宇治川の戦いで、一番乗りの軍功をあげ、名声がとどろいた。頼朝の没後、出家して奈良で修行をし、さらには、西日本各地を周遊し、建保四年（一二二六）二月十五日に死んだ。数え年七十五であった。

【注】佐々木高綱―講談社『日本人名大辞典』では、「?」一二二四 平安後期く鎌倉時代の武将。佐々木秀義の四男。源頼朝の拳兵に兄定綱とともに参加し、各地に転戦。一一八四年、梶原景季と宇治川で先陣争いをした話は有名。左衛門尉に任ぜられ、長門守護となる。東大寺の再建につくし、建久六年高野山で出家。親鸞の弟子となつて名を了智といったともいう。建保二年十一月死去。近江出身。通称は四郎。法名は西入」となっており、多くの人名辞典では、生年不明、したがって享年も不明。没年も、本項記載（建保四年）の二年前となつている。この項は、後述の高綱の墓（五輪塔）の碑銘の記述によつてゐる。松江ヲ距ル西南数町―一町は約一〇九メートル。したがって数町は、数百メートルとな

るが、松江の中心地からの距離ではない。旧松江と乃木村の境（雑賀町）あたりから床几山を越えたみちのりならば大体あっている。このルートならば、方向も、南から西南と云ったところか。乃木村―現松江市浜乃木町のあたり。『出雲国風土記』では意宇郡に属し、野代（のしろ）社・野代抜池の名が見える。これが、乃白、野城、野木などに変化し、乃木の表記が定着したという。鎌倉時代には、乃木保の名が見える。江戸期は乃木村となり松江藩領。明治四年廃藩置県後、島根県所属。明治二十二年、周辺地域と合併して、乃木村が成立。明治二十九年、島根郡・秋鹿郡・意宇郡の区域をもって八束郡が発足し、乃木村もそのまま所属。昭和二十五年松江市に編入。意宇郡―先述。善光寺―松江市浜乃木にある。時宗寺院。実は、伝佐々木道綱の墓は、二〇一四年改修されて、往時の面影をとどめていない。以下、『松江市史』（一九四一）の善光寺の項目を引用することによって、旧容を知る手がかりとする。高綱の墓の碑銘は、早くから、ボロボロになっており、おそらく拓本等をもとにした翻刻が付されているが、省略する。

「円成寺を南に距たること数町、市の西南隅に近く、ここに一崎山善光寺がある。その所在は八束郡乃木村に属してゐる。善光寺は時宗に属し相州藤澤清浄光寺の末派であつて、正治二年僧心灌（佐々木四郎高綱）の開基創建せるを伝ふ。ここに乃木將軍齒髮塔がある。

善光寺の本尊はもと源頼朝の守本尊であつた。頼朝の歿後佐々木四郎高綱はその夫人政子より受領し、厨子とともに之を負ひ巡国してここに至り当寺を建造して遂に一生を終へた。始め円成寺の山内にあつたが、寛永十年堀尾忠晴の歿後、円成寺を其の地に建立するに当り、善光寺を現地に移転したと伝へられる。元禄元年時宗遊行派の本山第四十二代南阿独朗当国巡化に当り、其の末寺となつた。独朗は其の門弟覺阿良空を簸川郡塩冶村より招き、爾來寺運漸く隆盛となる。

本堂の壇上には、開基佐々木高綱六百年忌に際し製作せる佐々木高綱の木像を安置し、其の側に高綱所携の笈及び木瓜厨子あり、高綱及び其の後裔なる乃木將軍の位牌を安置してゐる。初め高綱の納骨五輪塔は荒廢したらしく、元禄年中覺阿円塔高八尺の記念塔を製作して五輪塔を包被した、正面に当寺開山心灌院殿法嶺源性大居士と刻み、右方下部に正阿弥陀仏と彫み、円塔背後に次の碑銘を彫刻してゐる（以下碑銘引用略）。

境内—境界の内部。日本では、特に、神社や寺院の敷地の内側をさす言葉となった。『続日本紀』神護景雲元年四月癸卯「境内の驗有る神祇を禱祀す」。円塔—『松江市史』にあるように、本来は五輪塔であったものを、元禄年間に覆つて作つたという。以下の記述は、塔およびその周りが改修整備されたため、現在様相がかなり変わつてゐる。一基—「基」は助数詞。機械・灯籠・墓石など、立てて据えておく物を数えるのに用いる。高サ一丈—約三メートル。『市史』にあるように、実際は八尺、二・五メートルくらいであつた。石燈—石灯籠。中国（語）にはなく、日本独自の物である。淳和天皇・梵釈寺に扈從す応制「飛棧樹杪雲を踏みて過ぎ、石燈岩頭烟を払い通ず」。八箇—箇は個と音義同じ。漢音「カ」、呉音「コ」。広く物や事を数えるのに用いる。上の「基」と重ならないようにした。老松—現在は「ひともとの松」。廻ラス二垣ヲ以テス—この石垣および石段等は、おそらく現存。法名ヲ心瀧院殿法嶺源性大居士—『松江市史』にあるように、墓塔の碑銘による。後世の人の命名であろう。塔を新たに作つた時に創作したのかもしれない。「心瀧（しんろう）」は通称の「四郎（しろう）」と音を通させたか。宇治川の急流（瀧）も意識にあつたかもしれない。「法嶺」は、高野山に登つて出家したという伝説によるか。源性は、近江佐々木氏が宇多天皇の第八皇子敦実親王の流れをくむ宇多源氏（性は姓に通じる）であることによるか。あるいは、源頼朝の寵愛を受けたことに関係するか。佐々木秀義—一一二—一一八四。平安時代後期の武将。父は佐々木季定、母は安倍宗任の娘。源義朝につかえ、平治の乱で敗れて近江佐々木莊を追われ、相模にのがれる。源頼朝の拳兵に息子とともに応援、功を認められ、近江にかえる。一一八四、伊賀平氏との戦いで討ち死に。七十三歳。第四子—ゆえに高綱は四郎と呼ばれる。源頼朝—一一四七—一一九九。鎌倉幕府初代将軍。義朝の三男。平治の乱後、伊豆に流されたが、以仁王の平氏討伐の令旨を受けて拳兵。鎌倉を本拠に関東に勢力を伸ばし、弟範頼・義経を西上させて義仲を討ち、次いで平氏を全滅させた。義経追討を名目に守護・地頭設置の許可を得て武家政権の基礎を確立。一一九二年征夷大將軍に任ぜられた。一一九九年落馬が原因で死去。元暦元年—平家方は引き続き寿永の年号を用いる。宇治川ノ役先登第一ノ功名ヲ拳ク—木曾義仲と源義経が宇治川で相対したとき、義経方の佐々木高綱・梶原景季が、源頼朝から与えられた名馬生唆（いけずき）。

磨墨(するすみ)で先陣を争い、勇氣と知略によつて高綱が勝ち、義仲軍は総崩れ。「頼朝ノ薨後——一九九年。「薨」は諸侯級の人の死に對して用いる。世ヲ遁レテ「遁」は「逃」にも作る。「易」文言「世を遯れて悶悶し」。陸機・演連珠「遁世之士」。南都—古都奈良の別称。京都に對する称。奈良の諸社寺をさす呼称として使用したのが始まりで、奈良の官大寺を南都七大寺と呼んだ。そのうちもつとも興隆した興福寺のみをさしている場合もある。竟二—とうとう。意外な結果になったときに用いる。西国ヲ周クリ—高綱は出家後各地を巡つたという伝説が残っている。建保四年二月十五日ヲ以テ卒ス—碑銘の説。通説は建保二年。年七十五—通説にしたがわず、碑銘の説に従っている。生年も諸説あり。

まつだ しやう
松田 淞雨

奮然叱馬蹴奔瀧、便見西軍勢已降。菟水流芳千歳下、誰囟埋骨在松江。

【訓読】奮然として馬を叱し奔瀧を蹴る、便ち見る西軍の勢已に降るを。菟水芳を流す千歳の下、誰か囟らん骨を埋さむること松江に在らんとは。

【訳】 佐々木高綱が気合いもろとも、名馬生唆を叱りつけて、瀧のような本流を蹴り進めさせるや、忽ち、宇治川の西側に陣を構えていた、木曾義仲方の軍が総崩れになる形勢となった。高綱の名声は、宇治川の流れのように、千年の後も流れ続けている。しかし、意外なことに、彼は骨をこの松江に埋めることとなった(のを知る人は少ない)。

【注】 奮然—ふるい立つさま。勇氣・氣力などをふるい起こすさま。韓愈・鄂州の柳中丞に与うる書之二「独り閣下奮然と率先して、界上に兵を揚ぐ」。叱馬—宋祁「雲梯馬を叱し西征を賦す」。蹴奔瀧—瀧は、中国ではあまり使わないう文字。日本の垂直な「たき」のみではなく、水平に近い急流・奔流をも指す。いろいろな発音があるが、ここでは押韻(江韻)の関係で、「ラウ(ロウ)」とよんでいるのである。奔瀧も、殺到するような急激な水流。范成大・贛江亭に寄題す「鼓旗西征して奔瀧を上り、思う所は見えず心は降り難し」。便見—「便」は、．．．するやいなやすくに、のニュアンス。方干・狂寇後劉尚書に上る「便ち見る台星の座隅に逼るを」。西軍—ここでは、木曾義仲配下の軍。

勢已降—情勢（戦況）が早くも降伏状態になつてゐること。孫二元・夜起きて茶を煮る「水火の声初めて戦い、旗槍の勢已に降る」。菟水—宇治川のこと。伝説上の皇族、菟道稚郎子命（『日本書記』の表記。うじのわきいらつこのみこと）にちなんで、「宇治」という地名が生まれたという。蕪村・澗河歌「菟水澗水に合す」。流芳—よい香りをあたりたただよわせること。曹植・洛神賦「椒涂の郁烈なるを踐み、蘅薄に歩みて而して芳を流す」。広がつて、名誉を後世に残す意味になつた。『三国志』魏志文徳郭皇后伝「並びに賢明を以て、芳を上世に流す」。洪适・余吏部挽詩三首其一「芳を流す千載の下」。千歳下—趙孟頫・玄洲十詠張貞居に寄す其十隱居松「当に知るべし千歳の下、子に遺すに清風を以てするを」。誰図—誰が思おうか。豈図らんや、誰か知らんや、に同じ。ただし、中国の用例は、誰が絵を描いたのかという意味で使う場合が多いようである。埋骨—遺骸を埋めること、すなわち故郷を離れた遠い地で死ぬこと。『後漢書』度尚伝「磐は骨を牢檻に埋む」。白居易・故元少尹集の後に題す「龍門原上の土、骨を埋むるも名を埋めず」。梅堯臣・靜山に游隱す「骨を埋むること林陬に在らん」。骨を埋めるといえば、蘇軾・獄中作「是（いた）る処の青山骨を埋む可し」がもつとも有名。

*宇治川の先陣争いの懐古から、宇治川が流れるように時が流れて、眼前の墓に意識が戻ってくる。ふと我に返る、そして、自分自身がこの場にいる巡り合わせの不思議さ。奇妙な感覚を表現した。

三島 雲滙

先登功績去無蹤、抔土空餘三尺封。一霎寒声白揚雨、似聞菟水叱驕龍。

【訓読】先登の功績去りて蹤無し、抔土空しく餘す三尺の封。一霎の寒声白く雨を揚げ、菟水に驕龍を叱するを聞くに似たり。

【訳】一番乗りの功績はもはやこの世に後をとどめず、ひとすくいの上に三尺四方の墓地がむなしく残つてゐるだけである。突然、一刹那、寒風の音が高らかにひびき、あたりが真っ白になるほどに雨を横なぐりに吹きつけた。そのかみ、宇治川でいきり立った龍のごとき馬を高綱が叱りつけている声が、あたかも聞こえてくるようである。

【注】先登―まっさきに敵の城に攻め入ること。一番乗り。さきがけ。先陣。『左伝』隱公十一年「穎考叔は鄭伯之旗蝥弧を取つて以て先登す」。後には、「登」の義を離れて、戦争一般の先鋒をいうようになった。『後漢書』段熲伝「追悼して南のかた河を度り、軍吏田晏、夏育をして先登を募ら使む」。功績―功勞。『荀子』王霸「功績は天地の如し」。伍喬・山水障子を観る「功績精妍にして世に倫少し」。去無蹤―劉長卿・洞庭駅に郴州使還るに逢う、李湯司馬に寄す「孤雲飛びて定らず、落葉去りて蹤無し」。抔土―ひとすくいの土。『史記』張釈之馮唐列伝「假令（たとい）愚民長陵（漢高祖の陵）の一抔の土を取るも、陛下何を以てか其の法を加えん乎」。この故事から、抔土は墓そのものを指すようになった。駱賓王の檄文「一抔之土未だ乾かざるに、六尺之孤安くにか在る」が有名。盧綸・棲巖寺隋文帝馬腦蓋歌「嘆ず可し隋陵一抔の土」。空餘―何胥・陳昭を哭す「復た酣歌の楽しみ無く、空しく燕雀の喧しきを餘す」。三尺封―封は土をもった墓のこと。『札記』札器「宮室之量、器皿之度、棺槨之厚、丘封之大、此は大を以て貴しと爲す也」。『後漢書』東夷伝高句驪「金銀財幣厚葬に尽くす。石を積みて封と爲し、亦た松柏を種う」。羅公升・感旧「但だ一寸の心を留めて、三尺の封に愧じざらん」。三尺は土をもった高さであろう。典故として用いたのであつて、高綱の墓のことではない。一霎―「霎」は本来、にわか雨の音。引いて、短い時間を表す。孟郊・春雨の後「昨夜一霎の雨、天意は群物を蘇えらす」。寒声―嚴寒の風雨の音。すさまじい気持ちを引き起こす。こがらし。朱艷「扶桑賦」「巨影空に倒れて而して漠漠、寒声夜を吹きて以て颺颺」。沈約・寒松「梢は聳えて寒声に振う」。白揚雨―「揚白雨」とあるべきところ。おそらく、訓読の調子と平仄の關係（挾平格）でわざとこの語順にした。白雨は、にわか雨のこと。激しくしぶきをあげて、白く見えるからであろうか。あられ混じりも考えられる。李白・蝦湖に宿る「白雨寒山に映じ、森森として銀竹に似る」。盧襄・上皇帝御製題扇面に画く所の木犀、從臣榮蕤に賜う「多謝す秋風雨露を揚げ、丹心―君の為に開くを」。似聞―きいたようだ。どうも・・・のようだ（だそうだ）。杜甫・遠遊「聞くに似たり胡騎走ると喜びを失いて京華を問う」。叱驕龍―高綱の乗ったという名馬生啜のことであろう。駿馬を龍に喩える。『周礼』夏官「馬は八尺以上を龍と爲す」。「驕」は、本来勇壯な馬を指すことば、引いて傲慢や凶暴の意となる。以下は、馬の喩えではないが、頼山陽『日本樂府』桶子峽「驕龍元を喪い敗鱗飛ぶ」。強至・競渡「驕龍水に戦い先後を争い、采鷹

川に横わり有無を半ばにす」。

*前首とは逆に、高綱の墓前に歴史のむなしさを感じていると、にわか雨をきっかけに、過去がよみがえる趣向。おそらく、前首と同時に作られたのであろう。

もの、ふの 跡訪ふ露の 光かな
松江 可物
まろえ じかり かぶ

【訳】武士高綱の足跡をしのび、この墓地に行き着いて、さて御霊を弔うことにする。墓には、露の玉が滴って、輝いている。その光をみていると、宇治川の先陣争いの水しぶきの幻想が浮かんでくる。露のようにむなししい一生と言えば一生だが、その生前の栄光も今なお語り継がれているのである。

【注】可物―本名、履歴等不詳であるが、おそらく山内曲川門の俳人。出雲地方の漢詩・俳句雑誌である『風流新誌』（明治十四年 一年舎出版）第壹号で、出雲の俳人の作が並べられている部分に、「御降や年八たしかに明ながら」の句を載せて、作者を「可物事 一外」としている。「事（こと）」は、通称・雅号などと本名との間に用いて、両名称の指す人物が同一であることを表す。おそらくそれまでの「可物」の号を「一外」にあらためたのであろう。『出雲名勝摘要』刊行前は「可物」と称していたことになる。また、第壹号と同年発行の『風流新誌』第貳号には、一外の作として、「笠もたぬ旅人もあり春の風」が収められている（マツエの俳人の列）。もの、ふの―「もののふ」は、歌語としては、多数を示す言葉に先行する枕詞として使うが、俳諧ではいわゆる武士の意味。越人「武士の鷹うつ山もほど近し」。跡訪ふ―昔の人を忍んで、遺跡を訪ねたり、事跡を探ること。さらに、なくなった人の霊を弔い、仏事を行う意味になった。『山家集』「あとをととふ道にや君は入りぬらんくるしき死出の山へかからで」。馬見「この盆は実の母のあと問て」。几董「なきあと訪ふて露にたたずむ」。露の光かな―「露の光」は、玉葉集「草むらに蛩乱るる夕暮れは露の光ぞ別れざりける」のように、和歌では明るいきれいなイメージで用いられるが、連歌では、天正四年万句「露の光の消ゆる笹原」のごとく、はかなさが詠まれる。ここでも、仏教的な無常観に近い感覚で使われているのではないか。

*芭蕉『奥の細道』の「夏草や兵どもが夢の跡」、「五月雨の降り残してや光堂」等の句境を生かしているように思われる。「跡」や「光」の語が見えるし、「兵」は「もののふ」に、「五月雨」は「露」（梅雨）に対応する。漢詩のように、宇治の先陣争いのことは言及しないのに、もののふの語によって、自然にそれを思い浮かばせる手法は面白い。墓の語も用いない。「あととふ」によって、高綱の事跡を慕って、墓参することがわかる。墓跡を訪れると露の光があり、その露の光を見ると、また宇治の先陣争い（とそのむなしさ、だから高綱は仏門に入った）が思い浮かぶという取り合わせ、圧縮的したがって言葉足らずな表現が、いかにも俳諧的である。

○龍頭瀧

松笠村（飯石郡）、鳥屋丸山中ノ瀧。是レナリ。高サ数十丈、幅凡ソ十間。下ニ淵潭アリ。奇巖怪石聳立シテ、蛟龍ノ飛ハント欲スル形状ヲナス。古木ノ葱々ト起臥スルハ、恰モ龍ノ鬚髯ヲ垂ル、カ如ク、口頭ノ深々ト白霧ヲ籠ムルハ、恰モ龍ノ雲霓ヲ起コスカ如シ。其声雷霆ニ異ナラス。一遊之レヲ眺メハ、光景佳絶ニシテ、人ヲシテ塵外ノ想ヲナサシム。

【訳】松笠村飯石郡鳥屋ヶ丸山にある瀧である。高さ数十丈（約二百メートル？）、幅は全て合わせて十間（十八メートル）、滝の下にはふちが広がっている。奇怪な岩石がそびえ立っており、龍が今にも飛び立とうとするような姿を見ている。青々とした古色蒼然たる樹木が立ったり臥したりしているのは、まるで龍が髭を垂らしているかのよう。その口あたり、白い霧がずっと立ちこめているのは、ちょうど龍が雲や虹を湧き起こそうとしているかのようである。龍の音は、雷がとどろいたのと全く同じ。一回ここに遊びに来て、眺めると、その光景の素晴らしさはこの世のものとは思えぬほどで、参拝者は俗塵を逃れた世界に入り込んだような気持ちになる。

【注】龍頭瀧―鳥根県雲南市掛合町松笠にある龍頭が滝（現在はとおおくこの表記である。瀧は本字、滝は俗字。以下瀧に統一）。雲南市のホームページ等によると、日本の滝百選に選ばれており、中国随一の名瀑とも称される。落差四十メートルの雄滝とその下流三十メートルの雌滝からなる。老杉に囲まれ、約四十メートルの高さから激しくしぶきを飛び散らせながら流れ落ちる雄滝は、まさにうねりをあげて昇天する龍のようである。滝の裏側には、滝観音が祀られて

いる見事な岩窟があり、裏見の滝を眺めることもできる。本項は雄滝にのみ言及する。松笠村―現雲南市掛合町松笠。村名は、江戸時代（松江藩）から確認できる。鉄山があった。明治二十二年町村制施行後も独立村として、存続。昭和二十六年飯石郡掛合村（その年に掛合町となる）に併合され、大字となる。掛合町は、平成十六年に五町村と合併して雲南市となり、現在に至る。律令制下の『出雲国風土記』では、飯石郡多禰郷に属していたらしいが、松笠の名はもちろん、龍頭が瀧の記載もない。飯石郡―現出雲市の一部、雲南市の一部、飯南市の大部分より成り立つ。律令制下の『出雲国風土記』にその名が見える。伊弉志都幣命（いひしつべのみこと）という神がこの地に鎮座していたことに因むという。江戸時代は松江藩・広瀬藩の支配下であり、廃藩置県の明治四年松江県・広瀬県の管轄となり、同年の府県統合により、鳥根県管轄となった。明治十二年（この書の発行の前々年）郡区町村編制法の施行により行政区画としての飯石郡が発足。郡役所が掛合村に設置された。鳥屋丸山―現代の表記は鳥屋ヶ丸。雲南市と出雲市の境にある。標高六八六メートル。この山から発する滝谷川の下流に、龍頭の滝がある。鳥屋（とや）は鳥小屋のことで、竹を編んで作った大きな籠のような形状で、山容がにていることからかく名付けたのか。松笠の地名も、そこから眺められる編み笠（または松ぼっくり）に似た本山の形状によるのではないだろうか。したがって、鳥重養、松井言正の歌中の「松笠（山）」も鳥屋ヶ丸山中（あるいはその山系の一部）をさすのではないかと思われる。「丸」は城郭のことか（二の丸、三の丸）。中世の山城が山頂付近にあったという（なお、雲南市木次町湯村にも同名の山があり、中世山城の遺蹟としてはこちらが有名）。高サ数十丈、幅凡ソ十間―丈は尺貫法（一八九一年。この書発行の十年後）では約三メートルだが、「大夫」の語でも分かるように古代は約一・八メートルだった。それにしても、ここの数十丈が五六十丈だとすると、百メートル前後の巨大な瀑布ということになるが、これは誇張であろう。そもそも、現在の観光案内等の落差四〇メートルというのも疑問で、下から見える落下部の全長はせいぜい二〇メートルといったところか。わざわざ、見えない上方からはかっているのかもしれない。とはいえ、確かに他の凡百の瀧を圧倒する雄大な姿であり、誇大表記をしたくなる気持ちはわかる。間は、中国語では元来、建物の柱と柱の間のことであったが、日本では、建築や検地などで長さの単位として用いられた。尺貫法では約一・八メートルだが、時代地方によってブレがある。瀧自体の幅は、増水期でも、十間

に及ばないと思うが、瀧の裏の洞窟とされる部分の大きさは測り方にもよるが、ほぼそれぐらいあるだろう。もつとも、瀧の飛沫が飛ぶ範囲を含めれば、かなり広大であると見なせよう。淵潭―深いふち、滝壺。酈道元『水経注』伊水「又東は淵潭と為す。潭は渾りて沸くが若く、亦た其の深淺を測らざる也」。蘇軾・入峽「綦紆として浩渺を収め、蹙縮として淵潭を作す」。奇巖―珍しい形の岩石。虞集・舒城县学明倫堂記「奇巖幽谷、往往にして昔賢有り」。怪石―奇怪な他に見ない形状をした石。『書経』禹貢「岱は、峽、絲、泉、鈇、松、怪石」。柳宗元・始めて西山の宴游を得る記「日び其の徒と高山に上り、深林に入り、廻谿を極め、幽泉怪石、遠きとして到らざる無し」。聳立―そびえ立つ。他を圧して、目立つ様子。杜甫・特進汝陽王に贈る二十韻「筆飛べば鸞は聳立し、章罷めば鳳は奮騰す」。蛟龍―みずちとたつ。本来は二種の伝説上の動物。深い水に生息。蛟は小さく無角、龍は大きく有角。蛟は洪水を起こし、龍は雲雨をもたらすという。楚辞・離騷「蛟龍を鷹き以て津に梁し兮、西皇に詔げて予を涉ら使む」。王逸注「小を蛟と曰い、大を龍と曰う」。後に漠然と龍の類いを指すようになった。『莊子』・秋水「夫の水行して蛟龍を避けざる者は、漁父之勇也」。飛ハント欲スル―黄鵠曲四首其四「飛ばんと欲するも復た飛ばず、悲鳴して群侶を覓む」。形状―姿形、外貌。『史記』刺客列伝「豫讓」形状をして知る可からざら使む。古木―古色蒼然たる気配がある、樹齢の高い木。何胥・関を出で使め被る「奔流下は石に激し、古木上は天に参わる」。魏徵・述懐「古木寒鳥鳴き、空山夜猿啼く」。葱々―草木が青く茂り茂りエネルギーに満ちた様の形容。王充『論衡』吉驗「王莽の時、謁者の蘇伯阿能く氣を望む。使いて春陵を過ぐるに、城郭鬱鬱葱葱たり」。庾信・周武帝を祀る歌十二首其七「黄帝雲門に舞い、神光乃ち超忽、嘉氣恒に葱葱」。李白・温泉宮に遊宿するに侍従する作「日出でて佳氣を瞻るに、葱葱として聖君を繞る」。起臥―起きたり、臥したり。常住坐臥のように、日常の生活を指す場合が多いが、ここは字義の通りで、古木が様々な姿態であるのを擬人化した。顔之推『顔氏家訓』養生「慎んで起臥を節し、均しく寒暄に適す」。鬚髯―顎やほおに生えるひげ。『漢書』高帝紀上「高祖人と為り、隆準にして而して龍顔、鬚髯を美しくし、左股に七十二黒子有り」。その顔師古の注に「頤（あご）に在るは須と曰い、頰に在るは髯と曰う」。杜甫・瞿塘兩崖「猿獍鬚髯古り、蛟龍窟宅尊し」。口頭―口のこと。頭は助字、「江頭」のように、そのあたりを漠然と指す。瀧を昇龍に見立てて、その口に当たる部分といえは、瀧の上部に当たると

かもしれないが、こゝは、瀧壺及び背後の洞穴を（真正面を向いた龍の顔の）巨大な口にとたとえたと見たい。『朱子語類』卷七六「天下の道理は只だ聖人の口頭に在り、口を開けば便ち是れ道理なり」。深々―垂直方向の水に對してのみならず、水平方向の空間にたいしても「深」という。水が深いと底が見えないように、霧が「深」くて濃密で、遠くが見えにくくなる様。張説・楊炯に贈別する箴「杳杳たる深谷、深深たる喬木」。崔櫓・華清宮「草は回磴を遮つて鳴鸞を絶ち、雲樹深深として碧殿寒し」。白霧ヲ籠ムルハ―杜甫・西閣夜「恍惚として寒山暮れ、逶迤として白霧昏し」。籠は、本来かごのような何かに覆われることで、白霧に籠められると受け身的に使うべきであるが、日本語では他動詞的に使う場合が多い。何かを空間に詰め込むようなニュアンスであろうか。胡寅・韓司諫叔夏樂谷五吟に和す（紙帳）「細皺寒波を巻き、輕明白霧に籠めらる（籠白霧）」。

雲霓―中国古代では、にじを龍の一種と考え、雄を虹、雌を霓と見た。したがって、雲霓は本来は、くもとにじの二つを指すが、やがて雲の意味は消え、二字でにじを漠然と指すようになった。屈原・離騷「飄風は屯して其れ相い離れ兮、雲霓を帥いて而して来り御す」はおそらくくもとにじ。『孟子』・梁惠王「民之を望むこと、大旱之雲霓を望むが若き也」は、注疏によれば、にじのみを指すようである。韓流・雨を喜び、三衢蘇大使君に呈す「震雷電を飛ばし雲霓を起こす」。雷霆―さまざまの雷鳴。霆は大きな雷。稲光よりも音に對していう。『易』：繫辭上「之を鼓するに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てす」。周密・潮を観る「既にして而して漸く近し、則ち玉城雪嶺天に際して而して来り、大声は雷霆の如し」。一遊之レヲ眺メハ―謝靈運・七里瀨「羈心秋晨を積み、晨は積みて遊眺を展ぶ」。遊覽に同じ。光景―もともとは太陽光。『楚辭』・九章惜往日「光景之誠に信なるを慚じ兮、身は幽隱して而して之に備う」。『説文解字』「景、光也」。蕭子範・春望古意「光景漢宮に斜めにして、横橋彩虹に照る」。転じて、景色、風光を指す。蕭綱・艷歌篇十八韻「凌晨光景麗らかにして、倡女鳳樓の中」。佳絶―「絶」は現代中国語で言えば「極了」、程度が甚だしく、他に類例がないほどに隔絶していることを示す助字（凄絶、壯絶）。劉德秀・賀新郎 西湖「歩みて繞る湖辺の佳絶なる処」。塵外―塵外は、俗人を離れた深山幽谷。張衡・思玄賦「塵外に遊んで天を瞥し兮、冥翳に抛つて而して哀鳴す」。孟浩然・武陵泛舟「坐して聴く閑猿の嘯、弥よ清くす塵外の心」。権徳輿・李二十二兄主簿馬迹山の寄せ見るるに酬ゆ「杳杳たり塵外の想い、悠悠たり区中の縁」。

清水南山
しみずなみさん

龍澄在吾雲之松笠村、去松江十三里。巉巖絶壁、相環如屏風。斯処即洞也。洞中東西五十歩。西岬掛瀑布。去崖上一丈餘、有突巖。瀑水激之碎如絲、咆哮鳴響如雷。土人曰、西国第一名瀑布。実絶奇也。瀑水飛下三十三尋云。事見風土記。

【訓読】龍澄は吾が雲之松笠村に在り、松江を去ること十三里。巉巖絶壁、相環りて屏風の如し。斯の処即ち洞也。洞中は東西五十歩。西岬に瀑布を掛く。崖上を去ること一丈餘り、突巖有り。瀑水之に激して碎くること絲の如し、咆哮鳴響、雷の如し。土人曰く、西国第一名の瀑布なり。実に絶た奇也。瀑水飛び下ること三十三尋なりと云う。事は風土記に見ゆ。

【訳】龍頭が滝は我が出雲藩の松笠村にあり、松江から十三里（約五十キロメートル）はなれている。ゴツゴツとそびえ立った絶壁は、ぐるりと屏風のように滝を囲んでおり、ここが洞窟になっている。洞窟の中は東西歩いて四、五十歩（約三十メートル）。西の崖に滝がかかっている。この崖の上から一丈（三メートル）あまり下ったところに、突き出た岩があり、滝の水がこれにぶつかって糸のように砕け広がっている。その雄叫びのごとき響きは雷鳴のようで、土地の人は西国第一の滝であると言っている。本当に素晴らしい景色である。滝の水が落ちる高さは三十三尋（約六十メートル）という。この滝に関しては『出雲国風土記』（実は『出雲国風土記鈔』）に記載がある。

【注】清水南山―例えば、講談社人名辞典に「?―? 江戸時代中期の儒者。出雲（いずも）松江藩士。「三清堂詩草」をあらわした。名は柔。字（あざな）は伯翼。別号に醉翁」とあるが、その来歴は不明である。龍澄―龍頭が滝。「澄」で「ず（づ）」の音を表すのは甚だ不審で、この表記の由来は分からないが、出雲国風土記鈔の注の部分にもこの表記が見える。というよりも、清水南山がこの書を読み、注の部分も風土記本文と見なした可能性が高い。澄の和訓「すむ」より、連濁して「ず」と読むという重箱読みだとおもわれるが、澄の呉音は「ドウ」で、龍頭の頭（ツ）と音を通じるからかもしれない。澄んだ瀧の水と関係があるか。吾雲―雲州。雲藩。出雲国、また松江藩のこと。去松江十三里―一里は約三・九キロメートル。松江から龍頭の瀧まで直線距離にして約四十キロメートルで、道のりはほぼ妥当か。巉巖―険しくてそびえるような山の岩のこと。また、険しい様。宋玉・高唐賦「巉巖に登りて而して下に望み兮、大抵

之積水に臨む」。酈道元『水経注』溱水「廟渚は石を攢むること巉巖、乱れて中川に峙ゆ」。李白・金陵歌范宣に送別す「石頭巉巖として虎の踞るが如し」。劉秉忠・居庸関を過ぐ「絶壁巉崑翠煙に倚る」。王弘・武夷歌「古人の好事今人廢ぎ、巉巖絶壁皆名を題す」。絶壁一切り立つた崖。謝靈運・石門最高頂に登る「晨に策つき絶壁を尋ね、夕べに息いて山栖に在り」。相環一王洋・講師を觀て感有り「紛紛たり士と女と、其の外に復た相い環る」。屏風一びょうぶ。「風を屏（ふせ）ぐ」に由来する。『史記』・孟嘗君列伝「孟嘗君客を待ちて坐して語る、而して屏風の後ろに常に侍史有り」。樓鑰・趙資政三層の樓を建つ。中層に書を藏す「環遶絶えざること屏風の如し」。斯処即洞也一斯処は此処に同じ。「即」の字がそぐわないような気がするが、「有」と同じ気分、ここにほらあながある程度の解釈でよいか。瀧の裏に、広い空間があるのを指している（裏見の瀧を觀るスポット）。洞中東西一實際は南北方向に近いようであるが、山中のこととて、方向感覚はいい加減なものだったのである。四五十歩一「歩」は、本来右足と左足を交互に一回動かして進んだ距離であるが、日本では片足で進んだ距離をいう。ここは正式の度量衡の「歩（ぶ）」（日本では、一・八メートル）ではあるまい。出雲国風土記鈔では、十四五歩になつてゐる。單なる誤写かもしれないが、洞窟といつても岩が大きくくぼんでいる体で、内外明確に区別される單純な構造ではなく、どこからどこまで測るかによつて違つてゐる。瀧の向かつて右手の瀧壺を取り囲む崖のくぼみ全体を指していると思われる。西峯一峯は崖の異体字。掛瀑布一瀑は、空中に飛び出て落下する水流。遠目に、白い布のごとく見えるので、たきを瀑布という。酈道元『水経注』溱水「瀑布梁に飛び、懸河壑に注ぎ、湍湍十許りなり」。去崖上一丈餘一突巖は、實際は一丈も下ではないようである（上流にもう一つ突巖があるようでもない）。瀧全体を誇大にとらえているためか。下からはわからないが崖の位置はもう少し後方にあるのかもしれない。突巖一突き出た岩。鄭板橋・画蘭に題す「身は千山頂上の頭に在り、突岩の深縫妙香稠なり」。溱水一簡文帝「招真館碑」「高巖鬱起し、青雲を帯びて而して峯と作り、瀑布懸流して、天河を雜じえて而して俱に洒ぐ」。劉斌「詠山」「石梁鳥路より高く、溱水天河に近し」。激之一水流が障物物につかつて、湧き上がった、飛び散つたりするさま。『説文解字』「激、水碍げられ表にして疾き波也」。『孟子』「激して而して之を行かしめば、山に在ら使む可し」。碎如絲一「詩経」皇皇者華「我馬維れ騏、六轡絲の如し」。咆哮一大きな声でわめくこと。葛

洪『抱朴子』清鑑「咆哮する者は必ずしも勇ならず」。引伸して、波や雷が大きな音をだすこと。庾闡・涉江賦「澎湃洗淅、鬱怒として咆哮す」。李白・公河を渡る無かれ「黄河西來崑崙を決し、咆哮万里龍門に触る」。鳴響如雷―詩文ではあまり用いぬ。日本語常用の「鳴り響く」によるか。貢奎・秋懷「階虫競いて鳴き響くこと雷の如し」。李洞・山泉「半空より飛び下る水は、勢去りて響くこと雷の如し」。土人一代々、その土地に住む人。『後漢書』虞詡伝「其の土人の鋒を推し鋭を執り、反顧之心無き所以の者は、漢に臣属するが為の故也」。第一名―現代語の第一位と同じ。韋莊・薛先輩に寄す「懸かに知る迴日綵衣の榮んにして、仙籍高く標す第一の名」。実絶奇也―「実」はその言葉通り、実際に。「絶」は、他からかけ離れて。劉長卿・四窗に遊ぶ「四明山は絶だ奇なり、古え自り陸に登ると説く」。飛下―吳融・谷口寓居偶題「峭壁削つて成り画障を開く、急溪飛びて下り繁弦に咽ぶ」。三十三尋―三十三尋は、日本において、瀧の名としてよく用いられる（例えば埼玉県飯能市、群馬県みなかみ町所在の瀧。さんじゅうさんひろまたはさんじゅうさんびろと読む）。おそらく、観音信仰が、命名の背後にあらう。法華経普門品の説く三十三身に基つき、三十三種の観音がいるという俗説による。日本独自の説で中国にはない。実際の高さは余り関係ないらしい。三十三丈の瀧（新潟県加茂市）というのもある。瀧以外にも、西国三十三カ所の三十三も観音信仰による。この瀧も、瀧観音をまつっている（但し、挿絵に見えるような観音祠は現在礎石を残すのみで、少し奥に地蔵を祀っているようである）。尋は、長さの単位。古代中国では八尺（約一・八メートル）。但し、慣習的に用いられた単位である。日本では、「ひろ」とよんで、同じく約一・八メートル（日本の度量衡で六尺）。但し江戸時代までは、海や瀧などにもっぱら用いられたもので、各地で長さは異なっていたが、一八七二年、太政官布告で、六尺（約一・八メートル）と定め、陸上の間（けん）と統一した。実際の長さにこだわる必要はない。云―のようだ、だそうだ、ぐらいのニュアンスだが、伝統的に「という」と読む。事見風土記―実は、『出雲国風土記』原本には見えない。この項明らかに岸崎佐久次『出雲国風土記鈔』を参考している。以下、大日方克己氏の『翻刻桑原家本『出雲風土記抄』（山陰研究（第七号）二〇二五附録）を参考にして、当該箇所を読み下す（原文の訓点のままではない）。

まずは、風土記本文（飯石郡多祢郷の条）。

「多祢郷郡家に属す天下造ら所し大神、大穴持命須久奈比古命と、天下を巡り行く時、稲の種を此処に随う。故、種と云う。〔神龜三年、字を多祢に改む。〕」

次いで、岸崎の鈔の部分。

「鈔に云う 此の郡家は先に、言う所の如く、多祢の郷懸谷村の中今郡と曰う処なり。(中略) 復た郡家より以西行くこと三十町許り、松笠村と曰う。此に瀑布有り号して龍澄の瀧と云う。予嘗て公務の暇、往きて其の澗に造つて、仰ぎ眺めば、則ち截然として高さこと三十三尋、測の深きこと亦た然るなり。懸崖巨石の間、白雪を飛ばし龍綯を翻す。水声聒々として人の双耳を乱る。東に石門有り。行きて之を視れば、窟穴の中太だ空洞として広さ十四五歩許り。其の半ばは測潭に入り、其の半ば白沙皓々たり。翠壁磊何なる処に飛瀧権現有り、乃ち観世音なり。寔に是、補陀海岸と謂う可き耶。頓に塵垢を洗いて、無垢清浄なり。且つ遙拝して而して退く矣。」

峭壁高懸一派垂、飛烟走碧氣凄其。請看三十三尋練、碎作千条万緒絲。

【訓読】峭壁高く一派を懸けて垂らし、飛烟碧を走らせ氣は凄其。請う看よ三十三尋の練、碎けて千条万緒の絲と作るを。

【訳】切り立った崖に高々と滝の流れが現れ、幾筋にも別れて、真下に落ちている。水しぶきが煙のように飛び散り、緑色を虚空に走らせて、すさまじい涼気である。この三十三尋の練り絹が碎けて、一千すじ、一万すじの糸になっている様を、どうかしっかりとご覧じて、心に刻みつけてほしいものだ。

【注】峭壁―切り立った崖。酈道元『水経注』河水二「其の下は、層巖峭壁、岸を挙げて階無し」。張翼・沙門竺法穎に贈る三首 其一「峭壁靈泉溜(したた)り、秀嶺青松森たり」。劉禹錫・桃源に遊ぶ一百韻「三たび休みて喬木に俯き、千級峭壁を攀づ」。高懸―沈約・禪雅二曲其一「雲孤清く引き、杳虞高く懸く」。唐求・行如上人に贈る「日日齋鐘の後、高く濾水の羅を懸く」。一派垂―一派とは、本来は川の支流。流といわないで派といったのは、岩に碎けて、本流から支流が分かれるごとく、瀧の糸がバラバラに散らばった様を表現したかったのであろう。蘇軾・世徐凝の瀑布詩を伝えて・・・「帝は銀河の一派をして垂ら遣むるは、古來惟だ有り謫仙の詞」。劉威・黃河賦「惟れ天河の一派、独

り殊に百川に類す。「一派」は、また感情や景色や音声について、ひとかたまりのある雰囲気を持つことも示す。元好問・自ら写真に題す「一派の春煙澹くして収まらず」。瀧が、細かく分かれてもや状になって一面に広がる様をいうのかもしれない。崔道融・雪竇禪「雪竇の峰前一派懸かる」は瀧の（分かれた）一筋をいうか。飛煙―ただようもやや霧。支曇諦・『釈文紀』灯贊「飛煙夜を清くし、流光洞照す」。何承天・鼓吹鏡歌十五首其四戰城南篇「朱火延いて起り飛煙騰がる」。走碧―蘇軾・南歌子「古岸青葙開き、新渠碧流走る」。趙抃・風に順いて前人に呈す「瞥然として兩岸瞬きて霎ち過ぎ、木葉黄を馳せ山碧を走らす」。氣凄其―凄其は本来寒さがすさまじいさま。涼しいさまを指すようにもなった。詩経・邶風・緑衣「絺兮綌兮、凄其以風」。に基づく。其は調子を整える助字。謝靈運・初めて新安桐廬口に往く「絺綌は凄其なりと雖も、授衣尚お未だ至らず」。何瑾・秋夜を悲しむ「氣は凄肅にして厲清」。陶潜・閑情賦「葉は變として以て條を去り、氣は凄凄として寒に就く」。皇甫冉曾て東遊す、詩を以て之に寄す「氣は凄たり湖上の雨、月は淨し剡中の夕べ」。請看―読者の注意を自分の驚きに導く言い方。自分の感動を読者に共有してもらいたい気持ち。李白・怨情「請う看よ陳后の黄金屋、寂寂として珠簾網絲を生ずるを」。杜甫・秋興八首其二「請う看よ石上藤蘿の月、已に洲前蘆荻の花に映ずるを」。三十三尋練―先述のように「三十三尋」は、日本特有の瀧の形容。瀧を長いねりぎぬに例えたものは、たとえば、徐夔・尚書の泉山瀑布を詠むに和す十二韻「千尋の練は写し長年在り、六出の花は開き夏日消ゆ」。碎作―楊万里・濛瀜灘に上る「幸自（もとより）瑠璃青一片、落灘は碎けて雪花堆と作る」。千条万緒絲―何万本の糸のごとく、瀧の水が幾筋にも分かれるさま。千端万緒と同意。『朱子語類』「心之制は、亦た是れ義の全体の処に就きて説け。事之宜は、是れ千条万緒各の宜しとする所有る処に就きて説け」。『漢武帝内伝』「道を求め命を益すは、千端万緒、皆五帝六甲靈飛之術を須いる」。『晋書・陶侃伝』「終日膝を斂めて危坐し、閫外の多事、千緒万端、遺漏有る罔し」。薛季宣・塊坐「萬緒の絲は焚れ太和を汨す、終朝得る所竟に何も無し」。千条は、本来ヤナギの糸のような枝に対していうことが多い。別離の情との取り合わせとして用いられる。孟郊・雜曲歌辭其一「楊柳別愁を織る、千条萬条の絲」。

*瀧に関する詩なので、当然、李白・廬山瀑布の水を望む二首其二を意識する。「日は香爐を照らし紫煙を生ず、遙か

に看る瀑布の前川に掛かるを。飛流直下三千尺、疑うらくは是れ銀河の九天より落つるか」と。一↓三十三↓千↓万と数字を繰り返しつつ、だんだん大きくして、瀧の広がるさまに対応させる修辭は、行き過ぎの感があるが、言葉遊びとしてはなかなか凝っていると思う。

一回来看一回宜、二度看来二度奇。欲画不成詩不到、瀑前把筆立多時。

【訓読】「一回來り看れば一回宜し、二度看來れば二度奇なり。画とせんと欲するも成らず詩とせんとするも到らず、瀑前筆を把りて立つこと多時なり。

【訳】一度目来て見たときは一度目なりに感動があり、二度目には、見たところ、それはそれでまた、二度目なりのちがった素晴らしさがある。絵にも描こうとしても完成することはできないし、漢詩でもこの境地を表現し尽くすことはできない。滝の前で筆を執って考えあぐねて、ずっと立ち尽くすばかりである。

【注】一回―崔国輔・王昭君「一回月を望めば一回悲しむ、月を望めば月は移るも人は移らず」。白居易・長安道「長安の道、一回來れば、一回老ゆ」。これらは、同様な措辭であるが、一回ごとに、毎回というつもりで使っている。ここでは、次の句の「二度」と対比して、「第一回目」の意味で使っているのである。新奇な修辭である。龍頭の瀧は、湯水時と増水時の雰囲気がかなり違う。来看―劉禹錫・巖給事に和す・・・二絶其一「玉女来て看る玉藥の花」。一回宜―釋慧暉・偈十首其六「一回妙を得て、二度妙を忘る」を意識しているであろう。看来―みたところ・・・のようだ。

項斯・蒼梧雲氣「亦た帰らんとする客有り、看来れば尽く白頭なり」。二度奇―「一度奇」の用例としては、徐集孫・看梅「歳寒の気味は人の知るは少し、一度相い逢えば一度奇なり」。この一度は、ひとたびごとの意味である。欲画不成―花蕊夫人徐氏・宮詞其一百二「宣城院は約す池南の岸、粉壁紅窓画くも成らず」。吳融・縣竹山四十韻「丹青画くも成らず、造化供うるも足し難し」。詩不到―「詩」は、上の「画」と対になって、動詞として用いている。江綵・宛転歌「芍薬に題せんと欲するも詩成らず」。張天英・山水を画く歌 米元暉の卷に題す「幾人か画かんと欲するも画き到らず」。瀑前―欧大任・曉に玉廬峯に登る「瀑前の木客茶竈を支え、雲裏の山都酒家を問う」。把筆―吳融・方

干処士に贈る歌「筆を把れば尽く詩と為る、何人か夫子に敵せん」。立多時―曹松・崇聖寺僧に寄す「山を望みて吟じて日を過ごし、鶴を伴いて立ちて多時なり（時多し）」。李中・洞神宮邵道者を訪ぬるも遇わず「羽客知らず何れの処にか去るを、洞前花落ちて立つこと多時なり」。

*繰り返しばかりの詩だが、作者としては周到な、先人未踏の技巧を凝らしたという自負を持っていたと思う。起句が「来看」で、承句が「看来」となっているのは、平仄の關係。「来看」の「看」は二四不同で仄声として用い、「看来」の方は平声として用いている（孤平を避けるため）。しかも、微妙に意味を違えている。普通の漢詩の作法としては、望ましくはない。望ましくはないが、新奇さを狙っていることは理解すべきであろう。

しま しげかみ
島 重養

まつかき
松笠をさしてきつれば雨ならてぬる、袂や瀧の白浪

【訳】松笠の山を目指していくといつので、傘を差してきたのに、我が衣のたもとがいつのまにか濡れている。ああ、雨に濡れたのではなくて、（かといつて失恋の涙で濡れたわけでもなく）滝の白波のしぶきにぬれたのであった。

【注】松笠をさして―松笠を指すと傘（笠ではない）を差すを掛けている。藤原輔相「住吉の岡の松笠さしつれば雨はふるともいな裳は着じ」を明らかにもとにしている。古今集読人不知「葦辺より雲居をさして行く雁のいや遠ざかる我が身かなしも」。きつれば―坂上常蔭「鏡山あけて来つれば秋霧の今朝や立つらむあふみてふ名は」。京極関白家肥後「山深く尋ねきつればほととぎす忍ぶる声も隠れざりけり」。雨ならて―承香殿女御「雨ならでもる人もなき我が宿を浅茅が原と見るぞかなしき」。ぬる、袂や―後拾遺集「いかにせむかけても今はたのまじと思ふにいとどぬるたもとを」。藤原公任「雨ならではかなき空にふる人も露にもぬるものところそきけ」。瀧の白浪―滝がたぎり落ちてできる白い波。また、白く落ちる滝。万葉集「み吉野の瀧の白波知らねども語りし継げば古思ほゆ」。源俊頼「やまひめの峰の梢に引きかけてさらせる布や瀧の白波」。

*まずは瀧の下流から道を登っていく。川のしぶきにぬれる。傘を持つてくればよかつたと思う（実際に持ってきたの

ではあるまい)。「松笠」の「まつ」は恐らく恋人を(が)「待つ」ことを掛けている。「ぬるるたもと」に、(失恋の前提の)恋の予感がただよい、名勝を訪ねる浮き立つた心が感じられる。

まつ井 言正
まつい のぶまさ

瀧の糸は真菅のみのとみゆる哉千よをいた、く松笠の山

【訳】 瀧の糸がますますで作られた簔のように思われることだ。長い時間を背負った松が茂っているこの松笠の山は。

【注】 瀧の糸は―藤原公任「たきの糸はたえてひさしく成りぬれど名こそ流れて猶きこえけれ」が念頭にあるだろう。公任の歌は、百人一首等のテキストでは「瀧の音は」となっているが、元来はこの形だったのではないか。中務「白河のたきのいと見まほしけれどみだりに人はよせじものをや」。真菅―菅(すげ)の美称。『千載集』「菅生ふる山下水に宿る夜は月さへ草の庵をぞさす」。藤原公実「旅人の真菅の笠や朽ちぬらむ黒髪山の五月雨の頃」。大中臣定雅「我がはしのぶの奥の真菅原露かかりてもしる人のなき」。みの―『夫木和歌抄』「吾妹子が袖をたのめて足曳きの山菅簔をとらできにけり」。みゆる哉―兼覽王「女郎花後ろめたくも見ゆるかな荒れたる宿に一人立てれば」。源顕房「水の色のただしら雲と見ゆるかな誰晒しけん布引の瀧」。千よを―千世代も続くような松の木をさしている。紀鹿人「茂岡に神さびたちて栄えたる千代松の木の歳の知らなく」。『後拾遺集』読人不知「君が代を何に譬えむ常磐なる松の緑も千代をこそふれ」。いた、く―松のごとき常緑樹を、真菅の簔のごとき瀧の上方に配置していることをいうのであろう。大中臣能宣「年を経て星をいたたく黒髪の人よりしもになりにけるかな」。徳大寺実定「老いらくの鏡の山の面影はいただく雪の色や添ふらむ」。松笠の山―鳥屋ヶ丸山あるいはその山系の、松笠のように見える山のことをいうのであろう。全体として、心の中に、巨人の姿が思い浮かべられる。それは、長寿の仙人のような靈気みなぎる何かなのであろうか。

*青々とした山の中で、大きく広がって落ちる瀧。それを、神々しい仙人の姿にたとえた。みる人も不老長寿になるような、ありがたさ。

北島 三綱きたじま みつな

ながらへてわれも千歳ちとせを松笠まつかさの瀧たきのしら糸いと来てやむすはん【初句「が」の濁点は原本にあり】

【訳】長く生きながらえて、こんな私でも飲めば千歳の寿命が期待できるといふ、この松笠の龍頭の瀧の白い糸のようになつてゐる水を、ふたたびこの地に来て手のひらに受けて飲みたいものだ。

【注】ながらへて―「ちとせをまつ」と「きてやむすばん」の両方に掛かつてゐる。文脈はねじれるが、和歌でよく見られる手法。瀧の水を飲んで（素晴らしい瀧の姿を实見して、靈的な感動を受けることを表す）長生きし、長生きすることによつて何遍もこの名勝を再訪したい。瀧の靈的な魅力がこの上なく強調されている。光孝院「かくしつとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな」。われも千歳を松笠の―『続拾遺集』「昔より君がためなる宿なれば我も千歳を松虫の声」。松は千年の緑を保つことから「千歳山」は松山をいう。『続後拾遺集』読人不知「真砂より岩根になれるちとせやまこや君が代のためしなるらむ」。『世間胸算用』五・四「町並みの門松、これぞちとせ山の山口」。新古今集「常磐なる吉備の中山おしなべて千歳を松の深き色かな」。瀧のしら糸―在原行平「こきちらす瀧の白糸（一本に白玉）拾ひおきて世の憂き時の涙にぞ借る」。紀貫之「春くれば滝のしらいといかなれやむすべども猶あわに見ゆらん」。来てやむすはん―むすぶは、両手を合わせて、水をすくう。紀貫之「むすぶ手のしづくに濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな」。

*前首で不老長寿の仙人にたとえられるこの山の瀧の水を飲んで、あやかりたいと結んだように見えるが、そのためには、瀧を指さなければならぬ。最初の鳥重養の句に戻っていくわけである。輪廻のように配置されているこの三首それぞれの最初と最後の二文字に気をつけたい。「むすばん」は、「むすばむ」の原形にもどす。まつ (matsu)・なみ (nami) ↓たき (taki)・やま (yama) ↓なが (naga)・よむ (yomu) ↓まつ (matsu)・…。二字の母音がしりとりのようになつてゐる。この配置は偶然かもしれないが、三首の底に無意識的な連鎖と反復を潜在させることによつて、読者のこれまた無意識の中に、この世ならぬ世界の一つの物語が形成されることを狙つてゐるようにも思われる。

北島三綱のこの歌と、字句の全く同じ歌が、『出雲國名所歌集二編』（富永芳久撰 嘉永六年（一八五三））に載つており、

そこでは作者は季唯となっている。この季唯は何者かという点、今村照蔭という人の別名らしい。『名家伝記資料集成』(森繁夫編・中野莊次補訂 思文閣出版 一九九一再版)の同人の項参照。同書によれば、北島三綱は北島孝郷(のりさと)の別名。大社上官で、もとは今村氏二男で、北島分家の養子となった人らしい。この今村氏が照蔭ならば、その実子ということになる。実父の歌を剽窃したわけではなく、むしろ実父の作品を示して唱和をもとめたという状況か。編集に際して、草稿をみた、星野文淑の勘違いによって三綱の作とされたのであろう。この時期の星野は病状が進み、確認、校正をする余裕がなかったらしい。

本稿は、

島根大学山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

一九一三 近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置——若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究(実施年度…二〇一九～二〇二二年度 代表 要木純一)

および、

科研費 基盤研究(C)

若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究——近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置

(研究課題/領域番号19K00296 二〇一九年度～期間二〇二二年度 研究代表者 要木純一)

による成果の一部分である。

